

サンゴの斃死と腔腸動物の発生状況について

瀬底正武

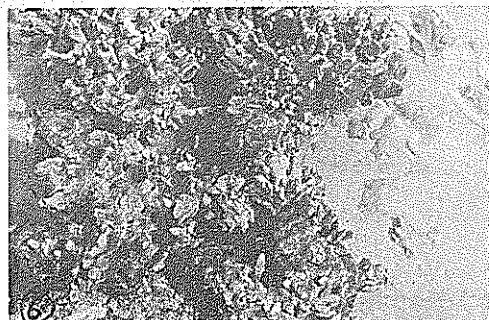
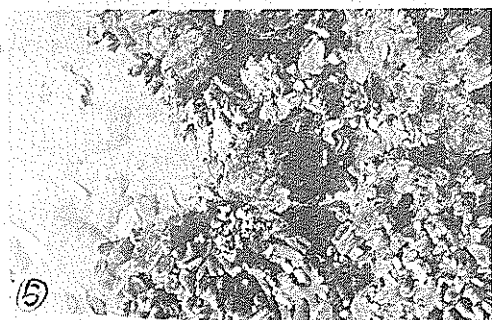
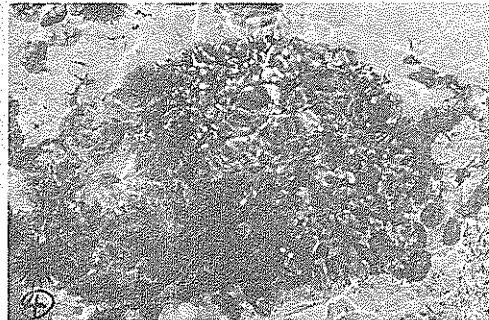
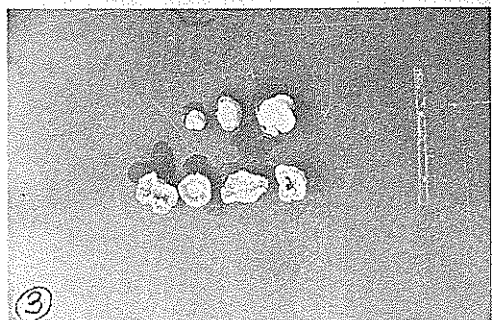
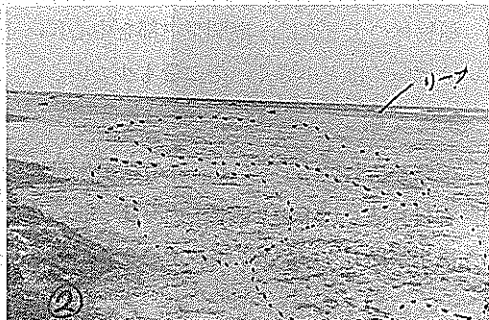
この調査は、今帰仁村仲尾次の漁業者が、村役場を通じて普及室に調査依頼があり実施したものである。調査に当り水産業専門技術員の知念正男氏、同村役場水産係の玉城真光氏の協力を得た。

発生地域：本部町沿岸、今帰仁村仲尾次沿岸 調査期日：1974年5月～6月にかけて実施

種名同定：琉球大学工学部生物学教室に依頼した。和名：腔腸動物（イソギンチャクに属する）

＜発生状況＞

発生地域やイソギンチャクの着生状況の生態写真を収録した。



- ① イソギンチャクの異状発生地域（今帰仁村仲尾次沿岸）
- ② 着生，生育はリーフ内のサンゴ礁及び岩礁上にもみられる。リーフ外にはみられない。
- ③ 腔腸動物（イソギンチャク）の生態
- ④ サンゴ礁一面に着生するイソギンチャク（水中写真）
- ⑤ 露出状態のサンゴとイソギンチャク
- ⑥ 水中より陸上に引き上げた状態（ろ出状態では自然にはくりする）

発生時期について、地元漁業者の話しによると1972年頃までは、ほとんどその発生はみられず、内海一帯では、タコ、イカ、カイ類等の採取が行なわれていたが、1973年～1974年にかけて、急激な異状発生があり、同時に魚貝類の減少がおこっているようである。(聞き込み調査：1974年5月)

特に、現在ではイソギンチャクの附着しているサンゴ礁周辺一帯にはタコ、イカ類の棲息はみられないようである。

観察調査の結果①同種の発生は今帰仁村仲尾次沿岸以外に本部町沿岸一帯にも同様な現象がみられる。

②よわりかけたサンゴや死サンゴにのみその着生、生育がみられる。

③生きたサンゴ礁地帯にはその発生はみられない。(観察調査：1974年5月～6月)

以上のような発生状況で、その原因については、現在の所明らかでないが、サンゴの斃死状況、一帯の底質の状況等から推察して赤色土の流出によるサンゴ礁内での堆積に伴なう斃死と同時に自然発生的にイソギンチャクの転移が考えられるのではないかと

そのことについては、琉大で調査研究中である。したがって、この報告は、あくまでも観察と聞き込み調査による発生状況の一端を紹介したにすぎない。

調査地	調査日	調査者	調査内容	備考
今帰仁村仲尾次沿岸	5月10日	山崎 隆夫	サンゴ礁の発生状況調査	
本部町沿岸	5月15日	山崎 隆夫	サンゴ礁の発生状況調査	
今帰仁村仲尾次沿岸	5月20日	山崎 隆夫	サンゴ礁の発生状況調査	
本部町沿岸	5月25日	山崎 隆夫	サンゴ礁の発生状況調査	
今帰仁村仲尾次沿岸	6月5日	山崎 隆夫	サンゴ礁の発生状況調査	
本部町沿岸	6月10日	山崎 隆夫	サンゴ礁の発生状況調査	